MATHEMATICAL SCIENCES

September 2009 Number 555

特集／シュレーディンガー

巻頭言

小伝に波紋を追う

小林 澈郎

1. はじめに

1926年チューリッヒでシュレーディンガーが起した大きな波は[1,2]，まずバルト海に臨むコペンハーゲンを津波となって襲った．ボーアとその学派の受けた衝撃は想像に難くない．時と共に拡がっていくこの一風変った波は，高い波柱が絡まりあう（entangle）現象が最近は注目を浴びているようである．古くはファインマンの経路積分のアイディアもシュレーディンガーの波に胚胎すると思われる．

この波の下にはシュレーディンガーの古典物理学の底知れない蘊蓄と，梵我一如というヒンドゥウの思想が通奏低音として流れているように思われる．

本特集では，この波の衝撃とその余波の拡がりを，それぞれの分野のエキスパートに伝えていただく．この小伝でシュレーディンガーの足跡を辿りつつ，論稿のガイドを勤めたい．

2. 出自[3]

1887年8月12日，シュレーディンガーはウィーンに生れた．父ルドルフはウィーン工業大学卒の技術者で家業のリノリウム油布工場経営者．知的な人で動植物研究を趣味とし，余暇に顕微鏡を覗き，論文も書く．実業界でも信望厚かった．母ゲオルギーはルドルフの大学時代の恩師バウエルの娘で，その母は英国の旧家の出である．ウィーンの中流上層階級家庭の一人っ子としてシュレーディンガーは，両親，母方祖父母，叔母たちに寵愛されて育つ．メイドやナースも含め年長の女性に囲まれて幼少時を過したことは，彼の性格形成に少からぬ影響を及ぼしたであろう．

初等教育は家庭教師が週2回．父もよい先生であった．ウィーン第一のアカデミッシェ・ギムナジウムに進む．古典語重視の人文主義的教育であるが，在学8年間を首席で通した．

青春時代のシュレーディンガーが空気を吸っていたのは，独特の陰影を帯びた妖しい文化の華咲くウィーンである．

華麗な女性関係が屢々顰蹙を買うシュレーディンガーという風評の外因の一つは，所謂「ウィーン世紀末文化」[4]が醸し出す耽美的・頽廃的な雰囲気の中で若い時代を堪能したことにもあるのではなかろうか．当時の富裕市民階層は，陽気に芸術を愛し社交を楽しんでいた．女性には慇懃に接し，気の利いた会話が求められた．しかし，その中核には，常識的道徳観念などの想像を絶する奔放な性関係がオブラートに包まれて鎮座しているのである．